Dennis Brain (1921-1957)

デニス・ブレイン

没後 50 周年記念祭

演奏

湯浅　愛美(まなみ)　1st horn
三島　友絵　2nd horn
和田　節(たかし)　3rd horn
沖津　幸宏　4th horn
（明石高校音楽部 OB）
坂本　直樹　5th horn
（佐倉フィルハーモニー管弦楽団）
湯浅　智美(ちはる) Piano
武田結(ゆい)**＆竹田まどか** horns

指導

清水　直行
（大阪フィルハーモニー交響楽団）

場所

2007 年 9 月 1 日（土）
14:00 & 19:00
アールルネサンス明石スタジオ

マラン・マレ／ル・バスク

1974 年、BBC（英国放送協会）がデニス・ブレインへの独自の追悼の情を示すため、秘蔵の放送録音を集めた LP レコード REB175 を制作した。その B 面最後の「ル・バスク」について、伴奏ピアニストのウィルフリッド・パリイが解説を書いている。

『このレコードにある短いマラン・マレの曲は、デニスの永遠のアンコールでした。1957 年（8 月 24 日）エディンバラ音楽祭の室内楽コンサートでの演奏です。デニスは私とデュカのホルンとピアノのための「ヴィラネル」を演奏しました。その後アンコールを演奏するために舞台に引き返す途中、デニスに「もし僕が君なら、きっとお客さんに曲の紹介をするけど」(“I should announce it if I were you”) と囁きました。すると彼は「繰り返し全部なし」(“No repeats at all”) と囁き返しました。そんな訳でこの極めて短い作品は、さらに短くなりました。ああ、これが彼のソリストとしての最後の出演になろうとは。私は、彼の友人であり同僚であったことにいつも感謝しています。』

レコードは、アンコールを歓迎する盛大な拍手に続いて、デニスがアンコールを演奏する前に観客に向かって語りかける声を捉えている。「たまたま見つけたとても短い作品で小さなフランスの舞曲です」(“a little French dance, which also happens to be the shortest piece I know”) （観客ドッとどよめく）

「ル・バスク」は、元々ヴィオラ・ダ・ガンバと通奏低音のための「5 つの古いフランス舞曲」第 5 曲であるが、デニス・ブレインが発掘したホルンのアンコール・ピースの定番として知られている。

モーツァルト／ホルン二重奏曲 K.487 第 12 番

1955 年 7 月 23 日（録音は同月 11 日）、BBC 第 3 放送講演リサイタル「初期のホルン」(The Early horn)でニール・サンダースと演奏したモーツァルトの「12 のホルン二重奏曲集」の最後の曲。番組中のブレインの解説「この二重奏曲で興味深いのは、中に 24 の倍音（ハーモニックス）を含む楽章があることです。高音 C の上の G までです。つまりバセット・ホルンを想定して書かれたのではないかと思われます。」スイス・ロマンド管弦楽団の Edmond Leloir が編纂した楽譜はニ長調だが、本日はブレインらが演奏したのと同じ「高さ」で演奏する。

モーツァルト／ホルン協奏曲第 4 番 K.495 からロンド（ティナ・ブレイン編曲ホルン二重奏版）

1943 年 6 月 21 日、マンチェスターで行われたデニス・ブレイン初の協奏曲録音でのできごと。指揮者のマルコム・サージェントが第 1 楽章で時間切れとなってしまい、残る第 2、第 3 楽章の指揮をコンサート・マスターのローレンス・ターナーが急遽代役を引き受けた。結果がとても良かったのでレコードは、発売されることになったが、指揮者の名前をレーベルにどう表示するかが問題となった。結局「デニス・ブレインとハレ・オーケストラ」として発売したために、多くのコレクターが指揮者の名前を知りたいとフラストレーションを募らせることになった。

1950～60 年代、人気を博したエンタテイナー、マイケル・フランダースとドナルド・スワンが 1963 年、シアター・ロイヤルで行われたショー「アット・ザ・ドロップ・オブ・アナザー・ハット」で第 4 番のロンド楽章の声楽版「イル・ウィンド」を歌った。その世代のイギリス人は、現在もモーツァルトのホルン協奏曲を聞くと、この抱腹絶倒の ‘歌’ を頭に浮かべるという。

1999 年、Cala Records が制作した CD、THE LONDON HORN SOUND でマイケル・トンプソンやデイヴィッド・パイヤットらロンドンのホルン奏者 8 人が録音したのもこのロンド楽章。

本日演奏するのは、デニス・ブレインの姪のティナがファーカースン・カズンズの著書 On Playing the Horn 第 2 版 (1992) のためにホルン・デュオに編曲したもの。

ティナ・ブレインは、デニスの兄レナードの長女。代々プロのホルン奏者を生み出してきたブレイン家の第四代目。香港フィルハーモニー管弦楽団などを経て、現在オーストラリアのシドニーを本拠とするフリーランスのホルン奏者。

ピーター・マクスウェル・デイヴィス／ファンファーレ～デニス・ブレインへ敬意をこめて（世界同時演奏）

第 1 楽章 アレグロ　第 2 楽章 デジーソ　第 3 楽章 アダージオ
第 4 楽章 アダージオ　第 5 楽章 モデラート　第 6 楽章 アレグロ

デニス・ブレインへのトリビュート。1957 年 9 月 1 日、悲劇的な自動車事故で亡くなったデニス・ブレインを偲んで何人かの作曲家が作品を書いた。1958 年 2 月 8 日、フィルハーモニア管弦楽団の同僚ニール・サンダースが初演したプーランクのホルンとピアノのためのエレジー。1961 年、チェルトナム現代音楽祭で初演されたマルコム・アーノルドの交響曲第 5 番第 1 楽章。PAXMAN で修復されたブレインのアレキサンダー・B♭シングル・ホルンが、事故後 45 年を経た 2002 年 11 月 15 日、初めて使用された記念演奏会で初演されたアーテム・ヴァシリエフの 8 本のホルンとオルガンのためのスタンザ。これらに今年、ピーター・マクスウェル・デイヴィスの新作が加わった。

東ミッドランド・ホルン・フェスティバルのスチュアート・バウアー氏がこの英国王室御用達の作曲家に作曲を依頼。ブレインの没後 50 年に、楽譜出版社に 50 ポンドを支払い、名前入りの楽譜を受け取る、という予約購読者を 50 人集めた。曲は、無伴奏のホルン独奏と 5 人のホルン・アンサンブルによるカノンの組み合せで、アマチュアでも比較的容易に演奏出来るように書かれている。

2007 年 3 月 25 日、英国ノッティンガム州ニューアーク、Djanogly Recital Hall で行われたデニス・ブレイン没後 50 年記念演奏会でマイケル・トンプソンとロンドン王立音楽院の学生達が世界初演。デニス・ブレインの命日に合わせた本日は、相愛大学音楽学部の湯浅愛美さんと明石高校音楽部ホルン OB、佐倉フィル（千葉県）の坂本直樹さんが演奏する。

デニス・ブレインの国内盤新譜

1955 年 6 月　日本コロムビア LP モーツァルト／ホルン協奏曲
1959 年 6 月　日本コロムビア R.シュトラウス／ホルン協奏曲第 1 番、第 2 番
1976 年 7 月　テイチク LP「デニス・ブレインの肖像」（BBC レコード原盤）
1977 年　東芝 EMI 2LP×3 巻「デニス・ブレインの芸術」
1980年　日本コロムビア LP「デニス・ブレインの芸術」（The Bruno Walter Society 原盤）
1984 年　RVC LP「ホルン協奏曲第 3 番」ケンペ指揮ベルリン放送交響楽団（伊 Laudis 原盤）
1989 年 8 月　東芝 EMI 11CD「デニス・ブレインの芸術」
1991 年　東芝 EMI LD「ベートーヴェン／ホルン・ソナタ」（Anvil Film 制作）
1993 年　ポリドール CD「ブリテン／テノールとホルン、弦楽の為のセレナード」（Decca 原盤）
2002 年 4 月　夢中人 CD「蘇るデニス・ブレイン」

デニス・ブレインに関する主な書籍

1975 年 3 月　音楽之友社　千葉馨／週刊 FM 編　「続・素顔の巨匠たち～ブレイン」
1979 年 11 月 小学館　松本零士レコパル・ライブコミック集 1
「不滅のアレグレット～デニス・ブレインの生涯　無限の走路」
1989 年 11 月 音楽の友　千葉馨／「私の先生連載 22　デニス・ブレイン」
1998 年 11 月 春秋社　スティーヴン・ペティット著　山田　淳訳
「奇跡のホルン—デニス・ブレインと英国楽壇」
1999 年 8 月　産経新聞社「正論」　千葉馨／「師の相貌」

展示品

1. サイン With Best Wishes Dennis Brain

小さな封筒に行われたサイン。横に鉛筆書きで「OBOE 31/10/49」。裏面にデニス・ブレインが1946 年から 1954 年まで在籍したロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団の主席オーボエ奏者レオン・グーセンスのサイン Very best wishes Leon Goossens と「~~1949~~ 1950」の鉛筆書き。

飯田市 木下直人様　寄贈

2. 英国空軍中央音楽隊米国公演 (1944/45)

105 名の楽員から成る英国空軍中央音楽隊(RAF Central Band)が、1944 年 12 月 18 日から 1945 年 3 月 1 日、アメリカ合衆国の 27 都市を巡る大規模な演奏旅行を行った。2000 年になってその演奏旅行中の舞台写真や記念写真、プログラム、新聞記事の切り抜きを綴った大きなスクラップブックが残されていることが明らかとなった。

バンドの隊員にはデニス・ブレインをはじめ当時の英国の一流演奏家が数多く含まれていた。ホルンのノーマン・デル・マー、デニスの兄でオーボエのレナード・ブレイン、フルートのガレス・モリス、クラリネットのアーチー・ジェイコブ、バスーンのセシル・ジェイムズ、トランペットのハロルド・ジャクソン、ヴァイオリンに至ってはデイヴィッド・マーチン、シドニー・グリラー、フレデリック・グリンケ、ハリー・ブレック、マックス・サルプターなど、いずれも戦後名だたるロンドンのオーケストラで、あるいはソリストとして大活躍する名人たちによるドリーム・オーケストラであった。

当時は第 2 次世界大戦中で、連合軍のノルマンディー上陸作戦の後、ドイツの全面降伏を間近にした頃だったが、スクラップブックの新聞記事には地元の女子大生 100 名がホステス役をつとめ、完璧に空調され、床をワックスで磨き上げたホールではダンス・パーティーが行われ、空軍関係者や戦争債 (War Bond) を購入した一般人のために行われた演奏会は、いずれも大変盛況だったことが伝えられており、アメリカは戦時下にも拘らず非常に余裕のあったことを感じる。

3. 英国空軍中央音楽隊米国空軍スクラップブック

現在の RAF Central Band 楽長 Gil Singleton より「デニス・ブレイン没後 50 周年記念祭」のために、主に写真部分をより細密に撮り直して寄贈されたもの。中にはカメラ好きのデニス・ブレインを偲ばせる 2 枚の写真がある。1 枚は桶に入った子犬にコンパクト・カメラを向けるブレイン、もう 1 枚はテキサス州サンアントニオのアラモの砦で集合写真の左端で何かにカメラを向けるブレイン。

4. ROYAL AIR FORCE BAND 演奏会プログラム（オリジナル）

1945 年 1 月 19 日午後 8 時 15 分、テキサス州フォートワース、ウィル・ロジャース講堂における RAF 演奏会のプログラム。聴衆を飽きさせないよう工夫されたプログラムだった。

（オーケストラ）	ドヴォルザーク／序曲「謝肉祭」
（軍楽隊）	ハイドン・ウッド／狂詩曲「海の旅人」
（弦楽オーケストラ）	エルガー／弦楽器のためのセレナード ホ短調
（ピアノ・ソロ）	
（軍楽隊とオーケストラ）	エルガー／行進曲「威風堂々」第 4 番
（軍楽隊）	ロッシーニ／序曲「ウィリアム・テル」
（オーケストラ）	グラズノフ／交響曲第 6 番ハ長調第 1 楽章
（軍楽隊とオーケストラ）	バッハ／トッカータとフーガ ニ短調

2- 4 Special Thanks to Gil Singleton, Band Master of RAF Central Band

録音

1. ロッシーニ/レスピーギ 「奇妙な店」
2. ヘンデル（ハーティ編曲）「水上の音楽」からエアー
3. ヘンデル（ハーティ編曲）「水上の音楽」からブーレ、アラ・ホーンパイプ

英国空軍(RAF アール・エイ・エフ)交響楽団 R.オドンネル空軍中佐指揮
録音 : 1944 年頃（HMV 試作盤、約 18 分）

デニス・ブレイン在籍当時の RAF 交響楽団のレコード録音として唯一残されているもの。日本ではもちろん英国で発売されたかどうかも定かではない。「水上の音楽」ではデニス・ブレインの率いるホルン・セクションが大活躍する。

4. ‘Music in Air Force Blue’

BBC 第 4 放送 2005 年 4 月 22 日放送録音（30 分）

デニス・ブレインやガレス・モリスら RAF 交響楽団のメンバーのインタビューや当時の録音で構成されたラジオ放送番組。アメリカ向けにベンジャミン・ブリテンが作曲したプロパガンダ（戦争宣伝）音楽、スーザの行進曲「星条旗よ永遠なれ」などが聞ける。1944/45 年のアメリカ演奏旅行とスクラップブックの話題も登場する。

from ‘Tour of The Royal Air Force Band in the United States December 18, 1944 to March 1, 1945’